主日礼拝説教「あなたにも聞かせたい」

日本基督教団石神井教会　2018年8月19日

【旧約聖書日課】イザヤ書　5章1～7節

1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために、そのぶどう畑の愛の歌を。
わたしの愛する者は、肥沃な丘に、ぶどう畑を持っていた。
2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り、良いぶどうが実るのを待った。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ、わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
4 わたしがぶどう畑のためになすべきことで、
何か、しなかったことがまだあるというのか。
わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに、なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。
5 さあ、お前たちに告げよう、わたしがこのぶどう畑をどうするか。
囲いを取り払い、焼かれるにまかせ、石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
6 わたしはこれを見捨てる。
枝は刈り込まれず、耕されることもなく、茨やおどろが生い茂るであろう。
雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。
7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑、主が楽しんで植えられたのはユダの人々。
主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに、見よ、流血（ミスパハ）。
正義（ツェダカ）を待っておられたのに、見よ、叫喚（ツェアカ）。

【使徒書日課】使徒言行録　13章44～52節

44次の安息日になると、ほとんど町中の人が主の言葉を聞こうとして集まって来た。45しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。46そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。47主はわたしたちにこう命じておられるからです。
『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、
あなたが、地の果てにまでも救いをもたらすために。』」
48異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。49こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。50ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。51それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。52他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

【福音書日課】マルコによる福音書　12章1～12節

1イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。2収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。4そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』8そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。9さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻っ

て来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。[10]聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。
『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。
[11]これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』」
[12]彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

教会から遣わされる

教会は、他の教会からおいでくださる方をお迎えする機会が少なくありません。旅行中の方、引っ越してこられた方、また、訪問する目的があってご自分の教会から派遣されて来られる方もあるでしょう。教会初心者としておいでくださる新来会者を歓迎するのはもちろんですが、わたしたちは、他教会からおいでくださる方のことも、別の意味で歓迎いたします。他の教会から遣わされて来られた方として歓迎するのです。

わたしたち自身も、ときに他の教会を訪ね、礼拝にあずかることがあります。家族や知人が他の教会に所属しているためにそうする場合もあるでしょう。特別に催される集会に参加するために訪ねることもあるでしょう。単に興味本位で行かれる場合もあるかもしれません。もしかすると、引っ越しなど事情があって出席教会を変えるために行かれる場合もあるかもしれません。いずれにしても、そのようなとき、皆さんは、石神井教会から遣わされて行かれるのです。

主イエスに従う弟子たちの集団から始まった教会が大切にした一つの使命は、自分たちの集まりの中に新しい人を積極的に迎え入れることでした。そして、それと同じほど大切にしたもう一つの使命は、自分たちの集まりの中から仲間の一人二人を送り出し、他の地の集まりを訪ねさせるということでした。それは、そもそも主イエスが弟子たちをご自分のもとから遣わされたことに基づくことだったのでしょう。今日の使徒書・使徒言行録に描かれるのは、アンティオキア教会から派遣されたパウロとバルナバの姿ですが、彼らが自分たちを拒んだ人たちのもとから去るときの「**彼らに対して足の塵を払い落とし**」という描写は、主イエスが弟子たちを二人一組で派遣されたときに命じられたとおりのこと（マルコ 6:11 など）を彼らも実践していたことを伝えているのです。

主イエスが弟子たちを派遣されたのは、もちろん、ご自分の働きを彼らに担わせ、より多くの地にそのお働きがもたらされるようになるためであったでしょう。実際に主イエスが存命中に派遣した弟子たちの働きがどれほどの成果を上げたのかは、分りません。弟子たちは喜んで成果を報告したようですが、主イエスはむしろ、ぬか喜びしないように釘を刺されています（ルカ 10:20）。そして、むしろ、弟子たちが主から遣わされる者として生きるようにされていることを喜ぶようにと教えられたのです。主イエスが弟子たちを派遣されたのは、主イエスご自身の「御父のもとから遣わされている」という自己理解を弟子たちに植え付けるためのものであったと言ってもよいのでしょう（ヨハネ 20:21）。さらに言えば、そのような自己理解を持つことによって、自分を送り出してくれた者の思いを知

るようになってほしいと、主は願ってくださっていたのではないでしょうか。
　わたしたちは、そのことを通して、本当は、神さまこそが、自分を送り出してくださった方なのだと、そのことを、教えられています。教会が送り出してくれる。送り出して、親心をもって祈り、支えてくれている。それは、神が送り出してくださっているということ。神が送り出してくださって、神の御心、父の御心をもって、支えてくれている、ということです。

収穫の喜びを分かち合うために

　わたしたちは、自分たちが送り出した者たちが、その働きの場で、本当に豊かな実りを収穫して、喜ぶことができているかどうか、分かりません。けれども、神が送り出してくださる先、そこは、実り豊かな、収穫を待つばかりの世界だと、主イエスは繰り返し、弟子たちに教えられました。
　「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」（マタイ 9:37~38）。主イエスは、そのように言われて、弟子たちを送り出されました。収穫は多いのです。実りは豊かなのです。それが、神のお造りくださった世界なのです。もう、わたしたちがその実りを収穫するばかり。収穫して、神にお返しして、でも本当はそうすることによって皆で分かち合わせていただき、喜びを分かち合わせていただいて、そして、神に感謝する仲間になるのです。それほど豊かな実りをいただいている。
　主イエスは、伝道して信者を獲得することばかりを言われているのではないでしょう。神が、この世界を実り豊かなものとしてお造りくださり、保ってくださっていて、必要な世話をする働きをわたしたち人間にも担わせてくださっている。そのことを通して、世界の実りを一番早く、確かめさせていただく特権を、人間にお与えくださっている。その働きに、遣わされるのです。
　福音書日課・マルコ 12 章は、「ぶどう園と農夫のたとえ」と呼ばれる物語。
　「ぶどう園」は、聖書では、神のお造りくださる世界のことです。もっと具体的に、人間が生きるように置かれている社会のことと言ってもよいでしょう。神は、「ぶどう園」を御自らお造りになられて、垣を巡らし、搾り場を掘って、見張りのやぐらまで立てて、もう後は、ブドウが実を実らせて、収穫のときを待つばかり、というところまで全部してくださってから、農夫たち、人間に、その「ぶどう園」をお貸しくださっている。神はそういうお方なのだ、というのです。親が子どものためにできる限りのことをして、大切な財産を受け継がせようとするように、神も、人間のために、そういうことをしてくださる。
　主イエスの神に対する信頼は、本当に大きなものです。神が、ほとんど何もかもご自分でご用意くださっていて、そういう世界に、わたしたち人間を命あるものとして置いてくださって、その世界の豊かな実りの収穫をするという、一番おいしいところの働きを託してくださっている。主イエスは、このたとえ話でそうおっしゃっているのです。ご自分をお送りくださった御父なる神に対する大きな信頼がなければ、こういうことは言えないのではないでしょうか。

神の御心を喜ぶ

そういう、父なる神に対する大きな信頼、そして感謝ということを、わたしたちが共感して聞くことができたら、どんなにか幸いかと思います。わたしたち皆が、いつも、そういう思いを共有して、教会のことにしろ、家庭のことにしろ、世の中のことにしろ、取り組むことができたら、どんなにか主イエスにお喜びいただけるような、幸いな歩みを重ねられることかと、思います。

わたしたちの現実は、むしろ逆なのでしょう。主イエスが、このたとえの物語でお語りになられている農夫たちのような姿が、わたしたちの現実の姿かも知れない。神から何もかもいただいているのに、何もかも備えていただいて、一番おいしいところだけ「働き」に加わらせていただいているだけなのに、そんなことを忘れて、まるですべてのことを自分の手で造り上げたかのような顔をして神を侮辱し、神のお送りくださる者をも侮辱して、感謝なんてどこにもない。私物化して、独占して、当たり前の顔をしている。わたしたちには、そういうところが、本当に多いのではないでしょうか。教会のことでも、家庭のことでも、仕事のことでも、世の中のことでも。

しかし、神の忍耐は、どれほど強いものでしょうか。神の寛容は、どれほど深いものでしょうか。主イエスがお語りくださったたとえとは違って、御子をお送りくださった神は、農夫である人間を御子殺しの報復として殺すということを、なさらなかったのです。かえって、人間を一度死んだ放蕩息子として、ご自分のもとに取り戻そうとしてくださった。すべての人間を我が子として、その身勝手さを忍耐してくださって、寛容にもまだ手を差し伸べて、支えてくださっている。

使徒たちは、そのことに気づかされて、突き動かされて行きました。わたしたちは、どうでしょうか。もっと、そのことに気づいても良いと思うのです。

自分の気持ち、自分の思い、自分の精神状態。そんなことばかりに、わたしたちの関心は向きがちです。でも、そういう関心の向け方は、わたしたちの心を健やかにはしません。神の御心に目を向けるのです。御心によって、実りを豊かに結ぶブドウ園が、この世界が、一切のものが、造られました。わたしたちが、豊かな実りを収穫する喜びを分かち合うことができるようにしてくださったのです。それが神の御心です。その御心に、もっと深く気づくようになったならば、そこには、主イエスの生き方が広がっているはずです。主イエスの歩まれた道が、続いているはずです。幸いな道です。人間の目には不思議に見えても、本当に幸いな道です。

主イエスは、その道を辿ってくるようにと、わたしたちをお招きくださっています。実りは豊かです。豊かな実りを、神がすでに備えてくださっている。わたしたち皆が分かち合ってあまりあるほどの実り。独占する必要などない。私物化したってつまらない。

本当に豊かな実りをいただいていることに、気づかせていただくならば、幸いです。実りの豊かさと、実りを与えてくださっている神の御心の深さに、忍耐と寛容に、気づかせていただくならば、わたしたちは幸いを得るのです。